

會



報

1952年7月

162

日本山岳會

アンナプルナ
最初の八千米

深田久彌

一九五〇年六月三日、ヒマラヤの八千米を越えた高峯の一つに、遂に人間の足跡が印せられた。その山はアンナプルナ、八〇七八米。その偉業はモリス・エルゾーグを隊長とするフランス遠征隊によつてである。

今年の一月三日附のフランスのある週刊誌の第一面は、そのエルゾーグの談話が載つていた。パリのラ・ボエチイ街にあるフランス山岳會のやゝ陽氣な大きなサロンで、このアンナプルナの征服者は往訪の記者に語る。彼の深い静かな眼ざしは、そのほつそりした顔を明るくしている。登頂の勝利の直ぐあとに受けた残酷な試練で、凍傷にかゝつた彼の指は切断されていた。

そのサロンこそ、一九五〇年三月二八日の晩、ヒマラヤ委員會の最後の會議がなされた所である。その席上で委員長ル・ユシアン・ドゥビイは、ヒマラヤ遠征の今日までの劇的な歴史を述べて「各國からヒマラヤの八千米級の山を目ざして既に二十二の遠征隊が派遣

されたが、一隊としてその目的を達したものはない……」フランス遠征隊の目標は、ドーラギリ（八一六七米）かアンナプルナであつた。

モリス・エルゾーグは當時の壯烈な経験を回想しながら語る。その勝利の記録 Annapurna premier 8,000 (アンナプルナ最初の八〇〇〇米) が出たばかりである。私はその記事を読むと直ぐその本を註文した。そして四ヶ月後それが手に入ると、数日間は何

もかもそつちのけにして讀耽つた。新刊紹介の例にならつて、先づその本の大體を示そう。

Maurice Herzog, Annapurna, premier 8,000, Artaud, Paris, Grenoble, 1952.

本の型はA5判、假綴で（他に特製本がある）本文二九三頁、他に三二のグラビアと、若干の略圖及び色刷の地圖が附いている。本文は二〇章より成るナレーティヴである。

エルゾーグの談話によると、この本は、彼が遠征から戻つて遭難治療のために入院したその病院で、全部口述されたものだそうである。一九五〇年の十二月から口述にかゝつて、翌年の六月までかかった。彼はもつと早く稿を進めたかつたのだが、その間に八回の

手術を受け、しかもその手術がいづれも數日を要したので、思うように捗取らなかつた。

石脊のギブスで身動きも出来ない中で、彼は當時の凄慘さを回想して、むせび泣きしながら口述したという。ある時は子供のよう泣いた。しかし彼はこの本があまり感情に走つてはいけないと警戒して、人間的な事には固執しないようにした、と語っている。

そんな風に遠慮してあるにも拘わらず、私はその本を實際に讀んでみて、非常に感動した。往訪の記者も述べている通り「その文字の裏にエルゾーグ自身の聲が聞かれるからである。精神力の偉大さ自己克服、不屈不撓、勇果果斷、一口に云えば人間の徳が、この本の中に、高尚に豊富に、隠れもなく現われているからである。」

先づ隊員の紹介からこの本は始まる。フランス人らしいエスプリの利いた紹介である。アタック隊員は六人、フランスで望み得る最良のメンバーである。ほかに外科醫と、寫眞擔當のイシャック（この人だけが唯一のヒマラヤ経験者である。彼は一九三六年のヒドン・ピーク遠征に参加した）と、連絡掛り（この人はインドで一行に合する）の三人、併せて九人が遠征隊員である。

一行は飛行機で、インドまで飛ぶ。九人のシエルバと約二百人の人夫とを得て、ネパールに向つて行進を始めた。十四日間のキャラバン旅行の後、チベットに通ずる道路にあるツクチャという部落に到着する。こゝが根據地である。充分な休養も取らず直ぐ、數隊に別れて登路の偵察に著手する。まづドーラギリ。彼等の豫定したルートは、印度測量部の地圖の誤りによつて、不可能なことを知る。

ドーラギリの北面に達しようとして再三の探査行をするが、失敗に終る。一方アンナプルナに向つても偵察が行われる。こゝでも大きな地圖の誤謬を発見する。

第五章の「アンナプルナを求めて」と題する條は、エルゾーグ隊の一週間に亘る偵察記であるが、彼等の遭遇する不意打や失望や模索の記述は、モンタージュの巧みな小説を讀むような面白さがある。

五月十五日、方々の偵察から歸つてきた全隊員が揃つて、こゝで重大な作戰會議が開かれる。遂にドーラギリは斷念して、アンナプルナ攻略に決定する。彼等は約一月近くを偵察に費してしまつた。モンスーンの始まるまでに、あと二十日はどしかない。しかも未だに確とした登路を発見していな

い。一同の氣は焦っている。

直ちにアンナブルナの北面を求めてアタック隊全員が出發する。四晩の野營の後、遂にアンナブルナ西北尾根の下に達して、そこにベースキャンプをおき、その尾根のコブに取りつく。がこの尾根の峻險さが彼等の前進を拒む。止むを得ず敗退するが、この尾根の上から始めてアンナブルナの北面を觀取することが出来た。

刻を失わずベースキャンプが進められ、北面の五、一〇〇米の位置にCIが建てられる。今や何妨げるものもなく八、〇七五米の高峯の偉容が、彼等の眼前にそより立つている。その氷河の壁にルートを検討しながら「アンナブルナ、遂にわが手に」の確信を固める。それから約十日間に亘る、この北面の困難極まる登攀こそ、この遠征のクライマックスであろう。

エルゾグは行動の一舉手一投足に至るまで細かく述べている。私は嘗てこれほど精細な登高記を読んだことがない。さすがは文學の國フランスの傳統を感じさせる。

數度の攻撃と敗退の後、六月二日、エルゾグとラシュナルの二人が高度七、三〇〇米にCV建設に成功する。同時に他の前進キャンプにもそれぞれ隊員が充當して、今や勝利は目睫に迫る。

六月三日吹雪の中のテントで苦しい一夜を明かした二人は、頂上に向つて、征頂の一步一步を進める。遂にアンナブルナ、世界で最初の八千米級の高峯が、彼等の足の下にあつた。歡喜極まりなし。

しかしこの歡喜がやがて慘烈な悲劇に代るのである。濃霧に襲われて二人ははぐれる。朝六時から苦悶の連續で、疲れきつて辿りついたCVには後續の他の二人の隊員が詰めていたが、その夜も嵐が吹きすさび止む間もなく雪が降り積つて地獄の一晚を過す。翌朝吹雪の中へ四人は出る。一間先も見えない。CIVに到着すれば、残りの二人の隊員がそこまで前進している筈だが、そのCIVが見當らず一日中雪の中を彷徨する。そして遂に七千米の高度で、クレヴァスの中でビヴァクという悲惨な立場になる。

あけ方そのクレヴァスの中へ雪崩が流れこんできて、彼等の装具を雪の中に埋めてしまふ。あけたその日は快晴であつたが、それぞれひどい凍傷にかゝり、雪眼になり、装具を失ひ、疲勞の極に達する。やつと救援隊に達着して、各自見るも無慘な姿で、次々とCIIに歸りつく。CIIは俄然病院のような觀を呈する。モンズンが遂にやつてきた。

その中を負傷者を擔いで大道走譜が始まる。エルゾグは殆んど半死の状態であつた。彼は自己放棄の一種崇高な幸福感を體驗する。その時の氣持を偽わらずに述べているが、その文章は感動的だ。彼がニイチエヤシウベンハウエルやスタンダーの愛讀者であつたことも肯づける。

こうしてヒマラヤの八千米級の頂上に、最初にフランス山岳會の旗が輝やかしく振られたが、それには貴重な犠牲が伴つた。しかしエルゾグはそれを悔むどころか、この山行によつて今までに知られなかつた新しい生涯が開けたと大きな喜びを以て語っている。「人々は理想というものは到達出来なものであると思つてゐる。しかし私にとつて、そして私と一緒につた隊員にとつても、アンナブルナは成し遂げられた一つの理想である。」これが力強い結びである。

人々はこの本を読んで、或いは彼等の行動に、賢しちに批判を加えるかもしれない。しかし私は、彼等の言語に絶した苦悶と頑張りを知つて、こうなるより他なかつたという最大限の必然を感じるのみである。おそらくこの感動に充ちた記録は、今後のヒマラヤ遠征に、幾多の貴い教訓と自信と鞭撻を與えるであろう。

この僅かの紙面で私はごく簡単に梗概を述べただけで、遠征隊の實際的な方面、即ち裝備その他のことには觸れなかつた。そういうことを論じる資格が私には缺けているからである。

ただ痛感したことは、われわれが、いかに時代おくれの裝具で山登りをしてゐるかということである。例えばフランス遠征隊の「高度用一組」というのをとつてみると、それは次の品々から成立つてゐる。

二人用ナイロンのテント 一張
寢袋 二個
空氣マツト 二個
アルコール焔爐 一個
シート若干枚 一個

しかも右の總量が約十キロ(二貫七百匁)だといふ。テントは小さい。「お棺テント」と呼ばれて、這つて入れねばならない。寢袋の中で腹這ひになつて「臺所」をする。

だからテントの目方は二キロしかない。ナイロンとジュラルミンで出来ていて、疊んで、ルックザツクの底にしまうことが出来るといふ。登山靴の底がゴム製であることなども、私には新しい驚きであつた。(六月十八日)

★この本は白水社で邦譯するべく著者及び出版社と交渉中で譯は會員近藤等君が當るそうです。

山上展望

六月の中頃だつたが勤務先の山岳會の若い人達に誘われて谷川岳へ久し振りで登つてみた。西黒澤のデブリを長い間登り、ガレ澤を暫らく雪溪について登り西黒尾根に出た。

もう少しで尾根に出ようとする邊りまで行くと、その尾根の上を、下から尾根傳いに來た登山者が長い貨物列車が走つてゐるやうに快速力で、頂上へ急いでゐるのが見えた。

まあこの列車の過ぎた後でなければとても登れないと思ひ、ゆつくり登つた。果せるかな頂上へ着いてみると百人餘の登山者に頂上は占領されて足の踏入れ場もない歸途もその貨物列車の後になつたが、貨物列車の通過した跡の山路を見て心が暗くなつた。雷をいづばいつけた石楠木の枝は折られて捨てられてあり、イワカミヤナンキンゴザクラの可憐な花は到るところにむしりとられていた。高山植物を愛護しましようという制札があるのと無かるのと、こんなことは山に登る者の心得ねばならぬ第一課だが、それさえも全然知らないのであらうか。

團體を引率するリーダーからして再教育しないことには、ピッケルも兎器に見えるだけである(H)



秩父宮様に

お目にかゝつて

村井米子

六月八日、折からの雨に、緑の色と香りが、空気を染めているような、木深いお庭、東京の中心地に居ながら、山を偲ばせる環境で、秩父宮様にお目にかゝつた。

妃殿下も御一緒に終始打ちくつるくだ御談話で、日本山林會三浦伊八郎、日本農會佐藤寛次の両會長、吉阪俊蔵氏、岡田紅陽氏等と山や森や、草木のお話が盡きなかつた。

両會誌に載せる半ば公開的のお話なので、山に關する一端を拾わせていたゞきたいと思う。

宮様はひそかにお案じ申上げたよりは、お元氣で、こちらから申上げた時間をもつと長くてよいと仰しやつたとか、二時間ほども活潑にお話はずんだ。

吉阪さんを中心に、スイスの山のお話の時など、細かい地名まで

いかにもお愉しそくに、その一夏に御登攀の、山の名を指折つて数えられた。低い山を擧げる方があらと、とつさに、

「あれは山じやない」

と仰しやる意氣……皆で大笑いしながら、いかにも若々しい、山の宮様ふりを嬉しく存じ上げた。

ルームにかゝつて居る宮様のお写真、あのお姿よりもお若いくらいに感じた。

山と森林の話のとき

「僕は、岩と氷の山が好きなので、北アルプスばかり行つて居るが……山の林も、木の葉の落ちてしまつた時が、好きだ」と仰しやつた。

さすが眞に山のお好きな山を深く味わつていらつしやるお言葉……私はふかく背いて何つた。

晩秋、初冬の山が好きになるまでには相當の年月がかかる。

たゞ一つ聞き逃せない事を承つた。富士山のケーブル問題の出た時に

「僕は、富士山ぐらゐの山は、かけてもいゝと思うんだが……」

と仰しやつたお言葉。思はず「まあ宮様が、そんな事を仰しやいまいしょうとは……」

と申上げた妃殿下が

「反對に、お思ひになつたでしょう……」

と宮様ともく大笑い遊ばした。

列席の一同は三浦先生だけが賛成、他は悉く反對で、ずいぶん活潑に反對論が聞わされた。借問す、横さん、松方さん、藤島さん

方と、このお話が、あつたか否か……三元老より、上高地の夏や、乗鞍山頂の荒れた様子など、御説明になつて居るか……何いたいと思う。

たとえトンネル式でも、掘り出した土の始末などで、甚しく荒らされる事を、私は現に日向高千穂峽の、水電開發工事で見ている。

宮様もその點は御懸念で、岡田紅陽さんに写真を撮る時邪魔になるか何うか、訊ねられた。

この問題は空想論でなく、いろいろの實例を集めて、日本山岳會の中に於ても、よく研究し討論を盡しておくべき秋と思われる。

そのゆえにこの秩父宮様にお目にかゝるの記を敢て認めた。

ちようど八甲田山の春スキーの写真を持つていたので、臆面もなくお目にかけた。なつかしく思召し、お氣に入つたので南八甲田、櫛ヶ峯の白いスロープを一葉厭じてきたが、想い出と遊心をそるものを御病後の宮様にお目にかけたのは……と、あとで私は心を悩まして居る。

(六、一四)

林 並 木 翁
訪 問 記★
原 全 教

五月初旬、四國の佐川町（高知縣高岡郡）に林並木氏をお訪ねした。會員中には林氏を御存知ない方が多いと思うが、明治卅八年十月入會、會員番號四九、現存會員では八人目という本會切つての長老であり、滿八十才のお年は多分會員中の最年長者であると思う。

それに夫人は七十七才、揃つて御健康であるのは何とも喜ばしいことである。松山から仁淀川のきり岸をうねるバスに膽を冷しながらまだ見ぬお宅を想像した。地方に見かける壯大な舊家か、或は土佐の京といわれる土地柄の古風な武家屋敷ではあるまいか、と。この豫想は後者に適中して、大きい石の築地の上、白い土塀を回らした四足門、新緑にふか／＼した庭園などが現われた。

土佐の住者饗のたゞきで、地の銘酒司牡丹の杯を重ねながら山の

話に夜をふかした。帝大英文科を経て明治卅五年金澤四高に赴任され同じく新任の田部隆次氏（重治氏の令兄）森田氏の三名で立山を縦斷し黒部へ入られた。色あせた写真には三人がびんとカイズルひげを立て、眼光けい／＼、當時の少壯學究氣質らしいものがうかがわれる。

昭和八年退官まで卅年、さらに京都にあること八年、立山の廿餘回をはじめ北アルプスを主としての旅は、北は大雪山より南は石鎚に及び、昭和十六年六十八才での第二回の槍・穂高行まで、四十年の山歴をつまれた。大正九年夫人四十いくつとき始めて同伴で富士に行かれた。和服にバスケットと洋傘をさげた美しい夫人との記念撮影もよくお似合である。

お宅のすぐ下の空地には牧野富太郎博士出生地の標石があつた。かの田中光顯伯なども同家中であり、大たい明治の勤王の策源地である土州の地に、この地味なお二人の碩學がでたのはむしろ奇異な感じであつた。「社會事情さへ許すならまた立山へ登りたい、來年はぜひ横さんをお連れするよう」にとの氏のお言葉をあとに、午後の列車で高知へ向つた。

會費

前號會報御參照の上成るべくお速くお送り下さい。



シプトン隊

Cho Oyu

望月達夫

豫定通りに計畫が進めば、今頃は何らかの結果が出ている筈である。

エ峰の西方十八哩に位するチョー・オユウは、勿論未登峰でありその周邊も未踏査の儘放置されているのだが、過去のエ峰遠征隊員にとつては、とりわけ馴染み深い山であつてエ峰のC5から、その背後に沈む落日の莊嚴な光景を眺めた者は終生忘れ得ない印象を与えられたと云う。

昨一九五一年のエ峰偵察の途次シプトン氏は南西からチョー・オユウを攻撃し得る可能性を發見した。チョー・オユウの占める位置は大體エ峰と同じであるため、天候の條件もそれと等しいと考えられている。つまり春季は強烈な北西風に襲われ、その

スイス隊がエヴ

エレストへ向つて

いるニュースは、

既に朝日新聞で報

ぜられている通り

だが昨年ネパール

側からエ峰を偵察

したシプトン氏は

王立地學協會及び

英國山岳會の協力

下にあるヒマラヤ

委員會からの遠征

隊を率いて、同じ

ネパール・ヒマラ

ヤの巨峰チョー・

オユウ(26,750ft)

を目指している。

を目前にしている。

威力は南方からモンズーンが到達するまで弱められない。豫定ルートはこの強烈な北西風にさらされるので、高所キャンプの設置には多大の障礙となることとが豫想され、頂上附近がモンズーン期近い降雪に蔽われるまで山頂攻撃が延引される心配がある。だがこれに反してチョー・オユウの最後の二〇〇〇呎は、エ峰に比べて手強くなさそう。假令季節的に恵まれなくても、五月下旬乃至六月上旬には頂上へ達し得る時間的餘裕が、エ峰の場合よりも期待し得る。登攀の困難はむしろ二、三、〇〇〇——二五、〇〇〇呎の箇所に存しているらしい。

今回の遠征隊の主たる目標はチョー・オユウの登頂にあるのだが、隊は更に(一)明年のエ峰遠征に適する隊員の訓練、(二)高峰登山の生理學的研究、(三)酸素使用の問題等の二次的目的をもつていた。

第一の目的のために、比較的多人數の隊員を揃えた。シプトン隊長の他に、E・P・ヒラリー、H・E・リッディフォード、W・G・ロウ、R・C・エヴァンズ、T・D・ボーディロン、キャムベル・セコード、A・グレゴリー、R・L・B・カレッヂの八名である。この中ヒラリー、リッディフォード二氏は昨年エ峰偵察に参加し又それに先だつてニュー

ジランド隊のメンバーとしてロウ氏と共に中央ヒマラヤに赴いており、三人共ニュージランド・アルプルの豊富な経験者であつた。エヴァンズ氏は一九五〇年ティルマン隊に従つてアンナブルナに赴き、ボーディロン氏は昨年エ峰偵察に参加している。セコード氏はカラコラムに三回の経験を有するヴェテランであり、グレゴリー、カレッヂ二氏だけがヒマラヤの経験はないがアルプスで大いに鍊え上

スイス・アルプスの遭難

諏訪多榮藏

水野祥太郎氏のスライドをみる

と、一九五一年三月のグリンデル

ワルトは大雪だつたようで、八月

には雪崩の事故が新聞にのつたり

して、なにか遭難が多い気がした。

會報一五八號に島田さんが、タイ

ムの通信員がスイスに駐在してい

るから山の記事は正確に出ると記

されているが、タイムス・ウィク

リー一〇月一〇日號に表題のよう

な記事があるので要約してみる。

五一年夏の登攀シーズンは例年

よりも雪解が遅れ、八月の終りま

で嵐や寒さが續き、登攀によい時

期が短く、したがつて遭難事故が

數週間の間に多數輩出する結果と

なつた。

スイス山岳會の統計によるとこ

れらの遭難事故は次の通りである

國別 遭難數 死者數

スイス 二一 二八

フランス 一二 一六

イタリヤ 五五 六一

獨・奥 三〇 三二

計 一一八 一三七

後二者は増加しており、前二者

は平均を越していないという。こ

以降平均

一九五〇最低 四八

一九四三最高 九一

三五—五〇年九五八

以上

遭難の原因

生理的(心臓マヒ等)

落石 四六

惡天候に曝された

ルートを誤る 六二

クレバースに墜落 七一

花をとろうとして墜落 八八

雪崩 一四七

雪や氷の落下 三一

登攀中の墜落 三五七

これらのうち四一〇名は原因が

不明確であるが、輕率・訓練の不

足・身體の適應不良・惡い裝備・技

術地理地誌の無智があげられる。

なお五一五名はガイドをつれず、

七七名は單獨行者である。死者數

は多く見えるが、スイス全體に廻

游する人や登山者と比較すると、

毎年訪れるツーリストは八萬人で

一般的には四、五萬人が數えられる。

夏冬登山する人は一五萬人強

であるから千人に一人の死者の割

合になる。

そこでスイスの山岳連盟では、毎年若いクライマーのために、コミスの説明と訓練を行い、地圖の読み方・氣象・應急救助・ロープ

げられた登山者だった。

第二の目的はアクリマタイゼーション及びディテリオリーションの科学的探究であつて、この爲にL・G・C・ブウ博士が同行し、高度二二、〇〇〇呎の地點で此の研究に従事することとなつた。

第三の酸素使用の問題に關しては、一九三八年テイルマン隊の一員であつたP・ロイド氏の監督下に製作された新しい酸素吸入器の性能を調査することが一つ。それから、酸素使用と結びついて當然提起される酸素使用の高度、高度に應ずる酸素注出の適量、登山者が休息時にも用いるか否か、繼續使用の場合、アクリマタイゼーションを低下せしめないか、萬一酸素の補給がなくなつた場合危険はないか等々の未解決の問題に對し多少共實際的なデータをもたらしことであつた。

尙隊長シブトン氏は、相前後して行われるスイス隊のエ峰遠征について次のような見解を附記している。

『スイス隊は粒よりの精銳によつて組織され、就中ロツシュ、ディッテル兩氏はヒマラヤの経験者でもある。若し彼らが天候に恵まれるならば、つまりモンソーンの襲來が幸にして相當遅れるならば、登頂のチャンスを得るであろう。例の大アイス・フオール状態は未知の要素だが、春季には吾々が昨秋出くわした時よりも遙かに安全であろう。かりにそうでなくともヌブツエの北西稜をトラバースして、それを捲くことは不可能ではない。この後者のルートは秋季はアイス・アヴァランシュにおびやかされたが、四月下旬乃至五月上旬は氣温がまだ低いから十分通過が出来る筈だ。これらの點につき最近

私はチューリヒでディッテルと論じ且彼に寫眞の印象を提供した。

過去に於て英國の遠征隊が成遂げた凡ゆるバイオニヤ・ウワークの後から、それによつて獲得された貴重な經驗と地誌的な知識を利用して、スイスが最後の榮冠をうかがうのは卓劣な舉であると言ふような言説が最近行われているかに聞く。併しこれは私の見解にも反し、またおそらく多くの英國登山者と雖もそうは考えまい。若し山登りに何らかの値打ちがあるとするなら、それは山登りの結果にあるのではなくして、その經驗の中にある筈である。山登りに激しい競争がおこり、それが更にナショナルリズムにまで發展したなら、登山は墮落するだらうし、無意味にもなる。

あらゆる登山、探検の成功と云う成功は先蹤者の努力の上に築かれたものだ。マゼラン、クック、アムンゼン、ウインバーの成功と雖も、彼らの先蹤者なくして考えることは出来ない。吾々はマロリイやノートンやソマーズがエヴェレストの頂に達しなかつたことを残念に思うのだが、彼らの登攀の物語は何時までも吾々の胸裡にいだかれていられる。吾々のパーティーはスイス隊が直面している任務を十二分に理解している。それ故にこそ彼らに缺くべからざる幸運を祈念して已まないのだ。』



やビッケル・山岳スキー技術を講義している。

* * *

一九四三年の最高の數は註釋として考えられるのは、戦時中に脱走兵が中立國スイスへ逃亡するたに走つた遭難事故が含まれていることだ。スイス國內に入るよりも一歩手前の獨・埃・伊の國境で死んだことも考えられる。四三年は非常に悪い状態であつた。北イタリア收容所から逃亡した二〇人のうちスイスに着いたのはたった二人であつた。もつともある登山家は二年もフランスにかくれた後モンブランの北端ゴル・デュ・シャルドヌをトラバースしてシヤモニーに越え、月光に輝くエギュ・グエルトなどを眺めた幸運な人もあつた。

一九五一年の統計はまだ出ていないが、これらの遭難數の語るものは我々にも、いろ／＼な指示を與えてくれる。

二つのアンビション

アルバイン・クラブの會長が任期をおえた時に行う挨拶は、折々アルバイン・ジャーナルに録されて異國のわれわれにも興味深いものだが、一九四九年十二月になされたT・G・ロングスタフの告別の辭は、さきのG・W・ヤングの場合同様私には特に感銘深く思われた。

ロングスタフは、在任中のクラブ内外の出来ごとを順次語つたあとで、戦後のクラブ財政の苦況に言及し、戦時の空白が結果したメンバーの減少を憂い、新しい會員獲得の要を説いているが、きりとコミッティは決してクラブの入會資格を低下せしめていないと、さすがは傳統の威力を十二分に表わしている。

最後に彼はまたこんな感慨をつけ加えている。『自分は若い頃生涯に二つのアンビションをいだいたことがある。その一つは王立地學協會のフアウンダース・メダルを得ることであつて、今から廿一年前に自分はその目的を達した。いま一つはアルバイン・クラブの會長になることだつたが、前者にくらべれば遙かに六つかしい第二のアンビションを、今や自分は成し遂げようとしている。』

アルプスからヒマラヤまでの廣大な天地を文字通り股にかけ、その多彩な生涯の登山や探検の數々を『This My Voyage』と云い得た老登山家の言葉として受けとるとき、これは一段と味わい深い言葉と思われないわけにはいかない。

日本の地學協會にはイギリスの王立地學協會のフアウンダース・メダルに當るものがあるかどうか窺明にして知らないが、同じ山岳會の會長と云つてもアルバイン・クラブの會長というものが、若い登山者の生涯のアンビションの對象になり得たというこの言葉の蔭には、アルバイン・クラブの會長にどれだけ大きな値打ちがあるかという消息の一端がひそんでいるように思う。(T.M.)



残雪の横岳尾根

阿部美子

會員通信

廿四日(五月)に海ノ口牧場小舎に一泊し翌日横岳尾根を登つて参りました。年経たタンネンバウムを通して目の高さ程にもそびえた奥秩父の山は静かによこたわつています。雪は一米から一米五〇もあり、アイゼンなく一人だつたものですから、横岳頂上まで十時間半もかかりました。倶松と雪の中をやつとぬけ峯に立つた時は心の中に歌が流れ思はずベルク・ハイルと叫んでしまいました。空は益々蒼々、足との岩がけにボツカリと咲くツクモソウは印象的でした。そよ風に吹かれながら、スケツチしたりしてゆつくり歩いて、かたむきかけた陽が山々の稜をは

つきりと美しくきざんでいくのを見ながら下りました。

(六月一日北佐久にて)

國見温泉附近

津川昌平

先日山友と雪を慕つて羽後駒ヶ岳、湯ノ森山と三日間スキーを愉しんできました。ときおり聞える雪崩の音、曲り竹の立つ音、鶯の鳴聲が春を思わせ楽しい三日間でした。

なおこの山の山日記、山小屋の補足やら参考までにお知らせします。一二七頁國見温泉は駒ヶ岳温泉が正しく、同地點にはこの他國見温泉八四〇米、屬岩手縣岩手郡御明神社、石塚牧蔵、番五—十月冬不可。自炊一〇〇圓前後があります。また東北電力會社小屋(廻線員詰所)八一〇米くらい、仙臺峠西方一・五軒、冷湯沼畔(地圖雪石)屬東北電力會社、番人無、冬可、設備良、一般開放せざるも冬期ならば照會あらば許可するものとあります。(五・一五盛岡)

武甲山

沼倉寛二郎

今年の國體豫選地(東京)は武甲山に内定したのでその調査という名目で六月五日現地へ参りました。

た。

飯能から一時間半ばかりバスにゆられ終點名郷についた頃は名栗川の谷間は薄暗かつた。白岩迄は思つたより道は悪くなく、妻坂峠を左に澤沿いに樹林を登りつめると、いかにも深山を思はせる白岩の寒村の燈が點在して見えました。依頼してあつた農家に一夜を乞うたところ、三日前お産があつたとかで快い返事ではなかつたが無理に頼み込みました。赤子の泣聲でろく／＼寝れなかつたが、七時前に切りひらかれた杉株を登り荒れた鳥首峠に出ました。右へ大持山の稜線は切り抜かれ氣持よく樹林帯は樂なルートでした。

小持山から武甲へは凄じい藪漕ぎで、幾つもの瘤を上下時折藪の中から秩父の山浪が素晴しく眼をたのませて呉れました。崩れかゝつた御影石壇を登りきると武甲御岳社は金く荒れ放題です。頂から展望は雄大で脚下に美しい秩父の平野、兩神、上信の國境の山々等すばらしいものでした。(六・二〇)

スイス旅信

佐藤助九郎

遂に目的の一つに今日辿りつき申候。而もインターラーケンから只乗りにて候と云うのはインターラーケンのロータリーで一席やり

申候處拍手々々の人氣、而てエミールの友人リチャード氏曰く、グリンデルワルドへ行くなら俺の車に乗れ、エミールの家迄送つてやるの事、何の事か地獄で佛、OKで乗り込んでエミールの家迄来て三人で乾杯致し候。是も先輩兄等、特にヘル・マキの徳のお蔭と専ら感謝仕り申候。(グリンデルワルドにて五月十二日夕)

エミールの宅で二日の豫定のところ四日泊つてしまいました。伊藤氏より成績のよい方でしようネ。朝早く美しい墓地に亡き友のねむる墓に花をさ／＼上げていました。その功德か私の旅はたいいてい幸運で來週より佛國のロヌ河を地中海に下り、伊太利を経て一應歸國致します。立山の計畫が急ぎますし單身の旅で相當やせました。

あるぶすのふもとにねむるはらからに
たむけて祈るかす／＼の花
グリンデルワルドの墓石、如何にや。

會報への注文

月原俊二

會報一六〇號にて發表された、廿七年度以降の會費及び入會金値上げの件は諸情勢より見て當を得たことと賛成します。アブレ派的

會員の動搖がこれで幾分でもブレイキとなり、もつとも美しい熱の有る理解ある會員だけのJACに立ち戻りたいものです。英國の貴族風にすまずといった意味でなく……

たゞ一時金六〇〇圓をせめて二回分納と云うことに認めて欲しいものです。それと日本の經濟情勢の動きによつて勝り切りではなく又安くするといった含みを理事及び會長にも持つていて欲しいと思います。

會報の原稿は編集子の企畫内に於いてこの人と思う會員には積極的に呼びかけて、要すれば一つのテーマとか、地方の岳界便りといった私信を發翰せられることを望みます。會報上で原稿募集を謳つてはあるが書く方とあれば誰かが書くだろうで不本意乍ら筆をとらないのではないでしようか。

バルナスを拜む

吉阪隆生

つい先頃アテネからデルフィへの途次は雪を頂くバルナス山を拜み得ました。南側は奥又白の様な絶壁でなか／＼よい山を神々も選ばれたものと思います。今又、偶然からスイスを通過する機會に恵まれ、ヴァレーの山々を仰いでいます。但し下車は不許可とあつて

眺めてあれこれと心の内で登山をする他ありません。ローマではテベツト學者のトウチ氏にお会いしてネバルの話をいろいろ伺いました。山を見ながら皆様の御健闘を祈ります。(五月一日)

澤渡にて

北田 正三

東京の用事がすんで十六日からちよつと上高地に入り明神を登り歸途白骨から乗鞍を経て更に木曾の簗原にバスで出ました。關西方面からは簗原經由が近くてよくありませんでした。しかしバスは一日一度

きりです。(六・一九 澤渡)

札幌から

河内 洋佑

早速山岳部に入りゾンメルによるヘルヴェチヤ行、若別岳の岩登り、小樽赤岩山の岩登りと、部員先輩と行を共にしています。佐久と違い北海道は足代がかさむので閉口です。

来たばかりの時は寒上に馬糞風が連日吹き荒み、北海道の自然にちよつと幻滅を感じましたが、今はポプラも芽を出しましたし、放牧の牛やら、寮のすぐ裏手にある原始林からひびくカッコーの聲やら、となか／＼多彩ですっかり気に入って満足しています。(六月二日 札幌)

巴里とスイスから

大島 堅造

中々よくやると感心しました。

出發の際には何かと御配慮を頂き感謝致します。新聞や書物はずつと読んでいますが三十年間も佛語は使わなかつたので、舌の廻りが悪く閉口です。獨乙語も恐らくそうでしょう。しかし旅行には少しも支障はありません。當地の新聞フィガロを読んでいましたらツールブリッケンの子供がクレヴァスに落ちて死んだとの記事がありましたから、切抜は御参考に同封します。春山は危いような気がします。(四月廿日パリ)

今朝のフィガロに佛登攀隊が南米バタゴニアのフィッロイに成功したとの記事が出ていましたから御覧に入れます。一寸見たときは山名が英系ですから。どこかと思つて讀むとアルゼンチナであることが判りました。國は經濟破綻の一手手前にありながら山の方は

それからこの間ブルヴァールの映画館で「佛國極北探險隊」のグリーンランド越冬・三千キロ走破のすばらしいのを見ました。日本の冬山に非常に参考になると思ひました。實に行届いたもので、パリと無線で連絡が絶えずとられ、必要品は四發の飛行機が運んでいました。雪中に穴を掘り飛行機で運んだ組立小屋を用意し、長い煙筒で空氣のチェンジをやつています。服装もエスキモーをつくりで眼を露出しているに過ぎません。

(四月廿六日 パリにて)

小閑を得てグリーンデルワルドとツエルマツトを訪ねました。兩地ともセーゾンが來ないので主な宿は全部閉鎖、グリーンデルワルドでは驛前のテルミヌス・ホテルへ泊りました。五月十日から幸いフィ

ルスト・ケーブルが開通したので二六〇〇メートルまで登り、アイガー、ミエンヒ、グエッタホルンなどの寫眞をとることが出来ました。ツエルマツトはグリーンデルワルドに比べて一層の寒村だと思ひました。ここはまだ村端れに雪が残っている位でホテルは全部休業、只スキーヤーのためにホテル・ヴルリーザー・ホフというのが開いていました。ゴルナーグラートへのベルグバーンは開道しているので小雨を犯して行きました。ホテルは勿論、誰れも驛にすらおらず、運轉手が下のリッフェルベルグまで引返したらというので少し下り、ホテルで朝食をとつている間に快晴となりマッターホルンを初め深山寫眞をとりました。モンテ・ローザは鼻先ですがガスがとれず寫眞はだめでした。見ていると五六人のスキーヤーはゴルナーグラートからスキーでリッフェルベルグまで滑降して來るのでした。歸りがけたワイスホルンやオーバ

1ガーベルホルンが姿を現わし、寫眞にとりました。初めて天然色のフィルムを使うのですからうまく寫つていくかどうか、紐育へ歸つた後でなければ判りません。グリーンデルワルドのストイリ氏へ紹介状を頂いたので土曜日夕方訪ねようとしたら、恰度小生の泊つているホテルに村民大會がありプレジデントとして會を主宰していたので十時過ぎまで待ちました。邪魔をしては悪いと思ひ、宿のフ라우に手紙を渡し、松方氏よりよろしくという言葉を添えて託しました。ベルンのブラヴァンド氏にも會いたいのですが、當地からバールゼルへ直行することゝなつたので残念ながら會えません。

南米バタゴニアのモン・フィッロイ登攀記の新聞切抜を送ります。佛國はインフレの何のといゝながら大登山隊を組織して遠征するのには羨ましく感じました。(五月十四日ジュネーヴ 以上松方氏宛)

山の朋文堂 新刊案内

國立公園協會著

國立公園寫眞集

A4判 特上アート紙

一六六圓一八〇頁上製

一、八〇〇圓

コンクール入選傑作の

豪華なアルバム

國立公園シリーズ(第1編)

上信越高原

B6判全アート紙

寫眞中心案内書

スマートなパンフレット

國立公園續刊

中央日本觀光協議會著

東京特選ハイキング

B6判 一〇〇頁 八〇圓

東京外十一縣の觀光課の推せんする六十コースの便利な案内書

巻頭寫眞十六頁

東京千代田區神田猿樂町

朋文堂

振替東京二五九八三

図書紹介

ガシエ著
近藤等譯

山のスポーツ

クセジュ文庫
白水社 一二〇圓

まづ序文の中で「登山とスキーはスポーツのなかに数えられる価値を充分にもつてゐる。スポーツのあらゆる性格を最大限にそなえている。」と登山をはつきりスポーツとしての前提の下に筆を起し、結語に於てはテクニクに徹しよ

うとする結果は、往々にして山に對する把握と理解を偏狭なものとするきらいを指摘し、「達人や選手になろうと目がけるより、岩の優秀なクライマーであり、すぐれたスキー技術をもつた完全な山岳人」を目標とすべきだと結ぶに至るまで、一貫して登山をあくまでスポーツと規定して疑わぬ態度は在來の山の書に見ない所である。登山とスキーとの關係について「異なる時代に別々に誕生したスキーと登山は、今日結合を見た」とし、或は「登山とスキーの喜びは立派に補足しあつてゐるのだ」として、登山に於けるスキー技術の

尊重の要を説いている點は、兎角兩者を別々のものにされ勝ちなのが國の山岳界にとつて適切な示唆でありまたスキーのテクニクとしては、フランス人の著者がアレ一派を肯定しながらも、山にあつては適當にシュテム・ボーゲンやシュテムクリスチヤニアを組み合せて行かうと可としている點も同感もてる。

全般を通じてフランスを中心とする登山とスキーの場所について技術について、裝備についてのわかり易い入門手引と紹介の書で、敢て専門書というには足りないが山岳人の間で一讀しても損ではない

アルプスの氷河四〇の研究。

C. Douglas Milner: The Dolomites—120pp., 150 illus. 6 maps. Robert Hale, 1951, 25/—

ドロミテの魅力はこの優れたクライマアの文と寫眞とによつて見事に現されている。

J. Hubert Walker: Walking in the Alps—224pp. illus. Oliver & Boyd, 21/—

アルプスへの案内書としてその美しさを伝えようとしてゐるが單なる案内記ではなく、かつての King の Italian Valleys of the Alps や Freshfield の Italian Alps 等、先蹤者のあとを追ひ「しかも、まるでアルプスを新しく発見するやうな新鮮な思いをさせる」と書評にあつた。

アルプス、スウィツァランドに關する本は戦後随分出てゐる。其後目についたもの。

S. P. S. Mais: Winter Sports Holiday—Redman, 12/6

Stella Gibbons: The Swiss Summer—Longman, 12/6

G. R. de Beer: Speaking of Switzerland (The New Alpine Library) E. & S., 21/—

Switzerland ("Blue Guide") Earnest Benn, 30/—

Showell Styles: The Mountaineer's Week-End

Seeley, Service & Co. 12/6

(イギリスの山とアルプスと)

Felice Benuzzi: No Picnic on Mount Kenya

William Kimber, 15/—

此間の戦争中アフリカで浮虜になつたイタリアの兵士がマウント・ケニアへ脱走する。苦痛、恐怖よりも山の魅力に打たれてしまう。英語で書いている。「山の本」ではないが面白い本らしい。

H. & S. = Hodder & Stoughton

い参考書であろう。

ほんのかけ足みたいな素讀で書評をする事は心に染まないが、渡歐を前にして時間も無いこととお許を乞う次第である。(入澤文明)

山想 V・VI 號 (一九五二年)

法政大学体育会山岳部刊
菊版一八八 写真二七葉
頒価 三〇〇円

戦後七年、日本の登山界もようやく立直つた感じであるが、その一つの現れとしてヒマラヤへ登山隊を送り出せるようになったことは、眞に喜ばしいことである。

そしてまた、各學校山岳部の動きも、目ざましくなつたが、最近法大山岳部は、他校にさがけてその部報「山想」V・VI 號を發刊した。

一讀して、法大山岳部が、終戦直後から、如何に「山」に精進してきたかよくわかれた。その努力のあとと、またその輝かしい成果の程が瞭らかに看取せられる。

記事として纏つたものは

「春の鹿島槍北壁へ」「冬の北岳バットレスへ」「冬の北鎌尾根より槍へ」「春の北仙人尾根より剣へ」「冬の蓮華岳東面尾根より赤澤へ」「千丈澤特輯」の六篇がある。いづれもその内容は立派でまたその行爲も敬服に値するもの

である。

特に冬の北鎌尾根の登攀が、良くない裝備に苦しみながら、悪天候に打ち克つてよくあれだけの成果をあげた事は、メンバーの経験と、實力のしかしめるところであらう。

たゞこの間、部として谷川岳において、不幸にも四名の遭難者を出したことは、實に残念なことである。その詳細な報告が、此の「山想」におさめられて、追悼號となつてゐるのである。

この事故の直接原因となつた残雪のブロックの崩壊と、ほと類似の遭難事故は、かつて(戦前二、三起つたことがある。然し、今後は、この人々の尊い犠牲により得られた教訓によつて、残雪期に入山する登山者達は、岩壁の上部のブロックの有無について慎重に考慮する事になるであらう。

収載せられた寫眞も豊富で美事なもので、困難なそして高處でなければ撮影し得ないものばかりである。

たゞ惜しむらくは、北岳バットレスや鹿島北壁等の記述に、ルート圖のないことで、これを合せ載せてあれば、われわれ後進のものに益するところ大であつたと思う。

(海野治良)

近頃英國で出版された山の本

(3) 田 邊 主 計

Geoffrey Winthrop Young: Mountains with a Difference 282pp., 12 plates E. & S., 1951, 18/—

この人の山登りの回想録。山との交りでのいろいろの變化に就て。1917年に片足を失ったが、18年ばかりしてロトホルンへ登る。その時の事が「25年後」としてクヌウベル、ヘイウッドと3人で寫されている寫眞と共に出てゐる。この書に限らず、これらのアルピニストの書物には「山」との交りと共に「人」との交りが誠に濃く美しく畫かれている。人々は「山」の事を知ろうとする以上にそれらの「人」の事について知ろうとする。従つて此の本の索引に人名が足りない事を惜しむ。さきに出たチンダルの本には索引がない。37頁に著者の寫した1912年Peny-PassでのHerfordとMalloryの寫眞がある。何とも云えない良い寫眞である。

Spencer Chapman: Memoirs of a Mountaineer 446pp. 48 illus-Chatto, 1951, 16/—

さきに出たHelvellyn to HimalayaとLhasa: The Holy Cityとを一冊にしたもの。右の2冊は「虎ノ門」で焼失した。前の本でレイク・デイストリクトで山に親しんだ少年が、やがてヒマラヤへ入るようになる。山岳を愛好する心の發展を語っている。チヨモリハリ登頂の記事は50頁にわたる。

W.H.Murray: The Scottish Himalayan Expedition

287pp. 36 photos—Dent, 1951, 30/—

1950クマオンに入つた記事。9の山を試み5に登つてゐる。Uja Tirche (20,350 ft.)の初登攀、Girthi Gorge行が目立つてゐる。マリは昨年のシプトンのエグゼレスト・リコンサンスに参加。

“Mountaineering in Scotland” “Undiscovered Scotland”の筆者。

Eric Shipton: Mountains of Tartary, 224pp. 29 photos H. & S., 1951, 20/—

シプトンは1949以来クンミンの總領事であるが1904—42, 1946—48の四年間カシュガルの總領事であつた。その間に歩いたSinkiangの知られない山々の記事。フンザーカシュガル—タシュケント。カラコラムの旅。シャクラギリ—再びフンザー等。その間にムツタグアタ、ボグド・オラなどに登つてゐる。ウインスロブ・ヤングはシプトンは當代一流のエクスポアであるが“Happily, he is also an illuminating writer”とこの書について推賞している。確かにシプトンの文章は心地よい。この書と共にティルマンの「チャイナ・トウ・チトラル」を読む事は興味深い事であらう。ティルマンはこの旅行を共にしているから。

The Alpine Annual II, 1951 28pp. of photos, Dent, 1951, 30/—

1951のアルパイン・ジアルから集録。

The Himalayan Journal: Vol. 16 (1950—51)

Oxford University Press, 15/—

ヒマラヤン・ジアルは1929に第一年を1940に第十二年をと毎年刊行されていたが其後はVol. 13—1946, Vol. 14—1947, Vol. 15—1949と出ている。

A.E.Lockington Vial: Alpine Glacier—90plates, 7 diagrams; Batchworth, 1951, 30/—

深田久彌著

おちこちの山

昭和二十七年五月 山と溪

谷社 二二八頁 二百圓

「おちこちの山」は著者が昭和十九年三月召集されて中國に渡るまで、うるさい世間に氣がねしなげに、ひそかに續けていた「さゝやかな登山」の記録である。「登山にも『報國』という文字が冠せられて、練成的な團體行動が要求され、自分一人で自由に山を樂しむのは、非國民視されるような空氣が濃厚であつた」きびしい時代の登山だけに、著者にも思ひ出が深いと「あとがき」で述べてゐるように、こころした氣持ちで、この頃のわれわれの仲間が山に登つてゐたのかという一つのドキュメントとしてこの本は山の文獻の中に特異な存在を主張することができよう。

ニセコアンヌブリが九百米附近からは立入禁止になつてゐたことや、眞田から土合へ行く省營バス（今の國鐵バス）が乗車賃一人二十錢に對し、スキー一臺三十五錢の貨物運賃をとつたことや、また山が何處でも戦争のため寂びれていたり、その山の麓で警戒警報を聞いたことなど、今日から見れば想像もできないような戦時下の日本の登山界の斷面がこく明に描かれてゐる。残しておきたい

文章だ。

それにしても文壇唯一の登山家といわれる深田氏が、戦時下の忙しくきびしい生活の合間を見てはたとえそれが氏の云う如くさゝやかなものであるとも、こつこつと山登りを續けていたという情熱には微笑みととも深い敬意を拂うべきである。

装幀は山川勇一郎氏で、カバーの繪は内容にふさわしくかつ好ましいものだ。

「たゞ一つ舊假名遣いだけは僕の主張である」というその「あとがき」だけが新假名遣いになつてゐるのは皮肉であり出版社のこれは大きなエラーであると思う。

(K・W)

テントマット
シュラフザック
リュックザック
オーバシューズ

各種一式

(シュラフザックの修理改造致します)

製造加工修理

吉田喜義商店

東京都杉並區中通町1(荻窪驛北口下車)

電話荻窪(39) 0990(呼出)

ウエストン祭に寄せて

藤 木 九 三

恒例のウエストン祭も第六回を迎えて基礎も定まり、いよいよ立派なアルプスの年中行事となった気がする。殊に今年からは主催が地元の長野支部に移ったことも落ちつきよくところに落着き、プログラムも板について今後の発展が期待される。

ウエストン祭という雨がつきものようになっていたが、今年は珍らしく快晴に恵まれたのは幸いだつた。それに本部からは日高さん、坂倉さん、渡邊君、地元の尾崎さん初め舊知や、馴染の顔に

接することができたのも、ウエストン祭ならではの感じだつた。

碑前祭では花環がささげられ、続いて日高さん、尾崎さんの山と人生について考えさせられる話や感銘深い詩の朗誦があつて、全国から集つた二百餘名の会員は深い感慨に打たれたのだつた。

それについて考えさせられることは、毎年夏山を前に各方面で行われる「山開き」である。富士、御岳、立山などいわゆる霊峰名山で行われる宗教的行事はさることながら、單に山小屋が営業を開始

大井川遡行

五月下旬若い友人と二人で大井川べりを歩きました。早朝静岡から上助ゆきバスにのり、終點の一つ手前の落合から出るオート三輪に荷物と相乗りして口坂本にいたり、大日峠を越えて大井川の谷に入り田代泊り、翌日沼平まで四里あまり、次の日は櫻島で中食して二軒小舎まで、それから西俣を廻行し小西俣から魚無河内をつめて悪澤岳直下の雪溪まで往復し、雨のデンツク峠を越えて五日の旅を終りました。

あざやかな若みどりの間を分け

て流れる大井川と、その奥からとき／＼顔をのぞかせる上河内、聖、赤石のベトリ雪を帯びたすがたは素朴でした。本流ぞいに桑ノ木平、下の島、沼平、樺島と適當なところに番人が住んでおり、路はすっかりよくなつていますから、新緑紅葉ころのそぞろ歩きにはこの上ないところです。すつかり東海パルプの方々のお世話になりました。同社では二軒小舎の事業所でも、小西俣と中俣との出会いと樺島との兩出張所でも、よろこんで登山者に便宜を與えてくれます。たゞ伐採がだん／＼聖、悪澤、ユーモリなどの山頂近くまで及び

するのが「山開き」という現状も味気ない。いつたい山登りを夏だけに限るのかのような建前で行われる山開きも今日では矛盾が多い。併し大衆的な山登りの最盛期を前にして「山祭り」というふうの行事をもつことは一般の願いだと思う。そこで従来の山開きに代るものとして「日本アルプスの父」を記念するウエストン祭こそ打つてつけの行事ではなからうか。そしてゆくゆくは單に松本市とか長野縣といわず、日本アルプスを管内にもつ山梨、富山、岐阜の各縣なりJACの支部が手をつないで盛り立てて行くべきではなからうか。

(七月五日 上高地にて)

かけているのは気がかりです。樺島から赤石へ、二軒小舎から千枚岳を経て悪澤へのみちはいゝが、悪澤から藤段を経て小石下にするみちは通れなくなつていそうです。小西俣の出会いから三伏峠へ山腹をからむみちは今夏中に切り開けをするといつていました。

(日高記)

雪崩埋没者の探索に
レエダーや赤外線の実験報告

昨年ユーゴーで開かれた登山團體の國際會議には、イギリス、ド

イツ、フランス、イタリー、スイスをはじめ十カ國から五十名の代表者が参加し、いろいろ有益な提案について討議が交わされた。中でもナダレに埋没されたスキーヤーや、登山家を手早く発見するためにレエダーや赤外線を應用して行われた實驗報告は、多くの人々の注意をひいた。わが國でもこの種の實驗について關心を寄せられる會員も多いと思われるので、その概要をロンドン・タイムスから抜粋してみよう。

まず、レエダーを使用して行われた埋没者の位置の確認は不可能だと報告された。また赤外線を用いる實驗については、氷のプロックはもちろん、積雪が一〇フィートになるとはや効力がないことが確認された。一方、同じ光線を用いてジュネーヴほか一カ所で行われた試験の結果では、埋没者が放射性能のある物質を携行している場合は発見の可能性があるが實驗の進歩の現段階では、登山家が効力を発生するほどの大量の放射性物質を携行すること自体がえつて危険であるという結論に達したと報告されている。(K.F.生)

山岳第四六・四七年

内容 豫 告
・ネパール紀行 西堀榮三郎

・冬の十勝岳・大雪山縦走 北大山岳部
・ギド・レイについて 日高信六郎

・明神岳五峯東壁及び前穂高 岩稜會 石岡 繁雄
・北尾根四峯正面岩壁の登攀 岸田 權二

・春の白馬岳以北の縦走 沼井鐵太郎
・南アルプス南半の覺書 中島 正文

・白馬岳志難攷(下) 松方 三郎
・題未定

〔追悼〕 八木貞助・百瀬慎太郎・入江保太・美木富士哉の諸氏
〔ヒマラヤン・ノート〕

一九五一年のエヴェレスト偵察アンナブルナの初登頂・スコットランド隊のガルワール遠征
總頁約二二〇頁 地圖寫眞多數
九月下旬刊行豫定

編集者より——綾内氏の努力によつて始められた會報の氣品というものを維持すると共に、會員の方々に親しんでいただきたいという念願で、バトンを引受けてはみましたが拙速の色彩の濃いものとなりました。次號の締切は八月廿五日です。原稿をお送り下さい。

會務報告

小集會記錄

第一四三回 六月十九日

講演 ネパール紀行

講師 會員 西堀榮三郎氏

(講演内容は次の山岳に掲載の予定)

役員會

五月 役員總會(十四日)

決議事項 本年度理事長及常務理事選任並に業務分擔、本年度役員運営、圖書室使用規定一部改正ウェストン祭。

報告事項 第八回國體登山開催地石槌山調査、島海山水雪技術講習會、ヒマラヤ委員會設置經過。

六月 常務理事會(六日) 役員總會(十一日)

決議事項 地方支部に屬する會費徵收手数料復活、ウェストン祭實施計畫、會員名簿作成。

報告事項 第九回國體登山、山岳・山日記・會報編集、四・五月收支、ヒマラヤ委員會經過。

國體協議會

第八回(五月廿日) 地元愛媛縣山岳連盟役員出席。

第七回(五月廿六日) 地元山形縣山岳連盟役員出席。

新着外誌

スイス山岳會々誌 Die Alpen は戦後會の圖書室に絶えて姿をみせなかつたが、昨年スイスへ行かれた高木理事がブラバント氏を通じて會誌交換を懇請したところ、この程同誌一九三八年—一九四八年(内一九四四年缺)の十年分一二〇冊が會へ郵送された。會はスイス山岳會並にブラバント、高木兩氏に深甚の謝意を表する。

また本年二月織内理事令弟オランダへ赴かれるに際し、オランダ山岳會へ連絡を願つたところ、最近同會から會誌 De Bergsids (April 1952) が到着した。

其後ひきつゞき同會から同山岳會創立五十年記念出版の圖書「ダツチ・アルピニズムの半世紀」(Eenhalf eeuw Nederlands Alpinisme) が送られてきた。A

4判寫真十餘葉を収めた美しい本である。又相前後して同會誌 De Bergsids のバックナンバーが多数到着した。會は衷心感謝の意を表する。

支部だより

關西支部

★昭和二十六年支部總會

時・昭27・5・23(金)5~8時
處・朝日新聞社會議室(二階)
人・會員二〇名・會員外一二名
司會 梶本徳次郎

1 26年度事業報告 (岸田)

2 同 本部報告 (篠田)

3 同 會計報告 (太田)

4 監事會計監査報告(仲西)

5 津田理事より支部ルームの維持運営等につき質疑あり、委員より説明する。

6 27年度役員選出

篠田支部長が座長となり選出方法を諮る。原則は互選であるが、支障のない限り前年度の委員に若干の交代を行い、引續き留任することを出席會員全員に承認された

新委員會の推薦により新支部長は篠田軍治氏に決定。

7 新支部長挨拶 (篠田)

8 27年度事業計畫 (田中)

講演 ヒマラヤ瑣談 諏訪多榮藏

新役員は左の通り。

支部長 篠田軍治

委員 太田敬、今西壽雄、伊藤洋平、梶本徳次郎、淺野清彦、岸田權二、大賀壽二、藤木高嶺、佐吉薫、酒井俊雄、田中榮藏、淺野廣三、大島輝夫。

監事 仲西政一郎、陸田幹郎。

★關西春秋會第三回例會 (二七・四・二七)

於 大阪堂島 ゼリコ

JAC會員にとつて快心の叫びと感激を以て迎えられるであろうところのヒマラヤ遠征計畫が近く公表されるという知らせをきいたので西堀榮三郎氏の西下を捉えその経緯を話して頂く。當夜の出席者は西堀榮三郎、今西錦司兩氏他十三名。

尙當日春秋會々員を限定。一應JAC舊役員關西在住者及びその推薦同意を得た者という事に内定し今後益々JACのよい傳統を活かして古い山仲間からの熱い集會所とする創立當時の趣旨を確定した。

(TOM生)

信濃支部

★春山技術講習會 去る六月七日から九日まで三日間、北アルプス五龍岳に於いて長野縣下高松生の講習會を催し参加者四〇名、支部員百瀬孝氏リーダーとなり二泊共雪上に暮營、無事目的を果して下山した。

昭和廿七年七月廿五日 發行

東京 都千代田區

神田駿河臺四ノ六

發行所 社團 日本山岳會

法人 渡邊 公平

電話(自五一二一) 日本體育協會

神田(至五一二五)

編輯者 渡邊 公平

電話(自五一二一) 日本體育協會

神田(至五一二五)

東京 都千代田區

神田駿河臺四ノ六

發行所 社團 日本山岳會

法人 渡邊 公平

電話(自五一二一) 日本體育協會

神田(至五一二五)

編輯者 渡邊 公平

電話(自五一二一) 日本體育協會

神田(至五一二五)

東京 都千代田區

神田駿河臺四ノ六

發行所 社團 日本山岳會

法人 渡邊 公平

電話(自五一二一) 日本體育協會

神田(至五一二五)

東京 都千代田區

神田駿河臺四ノ六

發行所 社團 日本山岳會